

みあかり



安乗岬の日の出（志摩市提供）

目次

- 特別インタビュー「伊勢は大切なふるさと」
- 夏休み親子神宮教室
- 内母さんの桜花の御神木
- 松阪神社お木曳き行事
- 諏訪神社宗旨祭
- 御遷座で「シャシャンボ」発見

教化特集号 第24号

三重県神社庁
庁報編集委員会

「伊勢は大切なふるさと」

夏樹陽子さん



—伊勢のお生まれと伺いました

はい、外宮さんのお膝元のお八日市場町です。祖父が大工さんをしていましたので、カンナやノコギリなどがいつも身近にあったことや、初孫なので大変可愛がってもらったことを覚えています。

—神社にはよくお参りされますか

そんなにしょっちゅうは行きま

せんが、新年には自宅近くのお宮に必ずお参りします。境内社に天照大神がお祀りされているので、特に親しみを覚えます。伊勢神宮には年末にお参りすることになっています。迎春準備の整った境内は非常に清々しく、厳かな気持ちになります。

—御神前では何をお祈りされますか

願い事はしません。神様は全て御存じだと思えますから。「これからも努力しますのでお見守りください」という気持ちで手を合わせます。人の力では及ばない力が存在すると信じていますから。

—女優さんの他、ジュエリー・デザイナー、講演活動など多方面で活躍ですが、人と出会いの中で特に心に残ったことはありますか

それはもう数えきれないくらいあります。例えば三國連太郎さんですと、お父さんの様な先生の様な存在です。三〇年以上のお付き合いを頂きましたが、「たった一度の人生だから、自分を本当に生かさなければ生まれてきた甲斐がない」という意味の色紙を達磨の絵を添えて頂きました。今も毎日それを見て、自分を生かすことは何かと考えています。三國さんはどんな立場の人にも丁寧な態度で接する方でしたし、「役者は一般

の人の気持ちから分らないといい演技が出来ない」と常に仰っていました。雪村いずみさんは、あれだけ有名な方なのにオーディションを受けたりなさるんです。「新しいことに挑戦するのはなにも恥ずかしいことじゃない」って…。

大滝秀治さんは「精いっぱい」と書いてくださいましたし、他にも三浦雄一郎さん、森繁久彌さん等々本当に大勢の方に素晴らしい出会いと教えを頂きました。

—夏樹さんにとってお仕事とは

大切なものです。糧を得るものであるし、自分を幸せにしてくれるもの、足りないところを気付かせてくれるものでもあります。まさに人生そのものですね。

—お仕事中や日常生活で神様を感じたことはありますか

眼に見えない大きな力を常に感じています。他人の見えないところで善いことをすれば必ず見てい

て下さる。逆に悪い行いも必ず自分に返ってくると思っています。

これは母の教えの影響が大きいと思います。いつも「徳を積みなさい」といわれていました。子供の頃、お隣からお醤油を借りて返しに行くのは私の役目だったんですが、「倍にしてお返しなさい」と教えられましたし、好きな物を送ってもらってはしゃいでいると、

眼の前にポンと便箋が置かれるんです。「まずちゃんとお礼状を書きなさい」ってことですね。これは今でもずっと実行しています。

——今回の神宮式年遷宮では「お白石持」に参加されましたね

外宮さんと内宮さんの両方に参加しました。非常に暑かったので大変でしたが、神様がお遷りになる御正宮の近くに石をおかせて頂けて、とても有難いと思いました。また真新しい檜の御殿とそれを飾る宝玉（高欄の上の五色の座玉）がとても美しく見てれてしま

ました。地元の出身者として、このような経験が出来たことに対して、改めて神の御加護だと感謝しました。

——子供たちに読み聞かせをしてもらえるそうですね

絵本の読み聞かせやトーク・ショーをしています。ある時、お墓の話をしたんです。「みんながこうやって楽しく生きていられるのも、お父さんやお母さん、お祖父さんやお祖母さん、そして御先祖様が戦争や色々な辛いことを乗り越えて、頑張ってくれたおかげなの。だから、ちゃんとお墓に行って御先祖様に有難うって言おうね」って話したら、みんな納得してくれて。あとで全員から感想文をもらいました。「心に残りました」とか「これからちゃんとお墓参りします」とか…。子供ってストレートに全部吸収してくれるので、やっていてよかったですね。ずっと続けていきたいです。

——最後になります。伊勢についての想いをお聞かせください

ふるさとが伊勢であることに誇りをもっています。伊勢うどんは大好きで、今も駅に着くと御最良のお店に直行しますし、他の色々な食べ物にも思い出があります。考えてみると全て母の好きだったもので、それが私の好きなものになり、ふるさとの大切な想い出になっています。また、親戚やお世話になった地元の皆さんですね。だんだん亡くなったりして寂しくなりますが、行けば色んなことがまぶたに浮かびます。神宮に一步足を踏み入ると、母と一緒に歩いた玉砂利の音や、風の音が蘇ってきます。人はいなくなっても杜はずっと変わらずにそこにあります。伊勢は思い出がいっぱい詰まったかけがえのないふるさとです。

聞き手

庁報編集委員長

宇治土公 貞尚

プロフィール

夏樹陽子

(なつき ようこ)

伊勢市出身。ファッションモデルとして活躍後、昭和五十二年（一九七七）東映映画「空手バカ一代」ヒロインとして女優デビュー。同年「新・女囚さそり 特殊房X」で三代目さそりを主演する等映画出演多数。テレビでは「暴れん坊將軍」「ザ・ハンゲマン」「大江戸捜査網」でレギュラー。二時間ドラマに多数出演し「二時間ドラマの女王」と呼ばれる。NHKの連続テレビ小説「マッサン」の他、最近ではバラエティ番組にも出演し、ドラマでは見られない自然体のキャラクターで人気を得ている。また舞台やミュージカルの他、ジュエリー・デザインとしても活躍、更に小学校での絵本の読み聞かせ、各種講演など多方面で活躍中。

夏休み親子神宮教室

毎年恒例の夏休み親子神宮教室が八月二十三日（日）に皇學館大学祭式教室と内宮にて、総勢六十三名（子供二十六名・大人二十八名・スタッフ九名）の参加者のもと開催された。

当日は午後一時三十分皇學館大学に集合し、祭式教室にて開会式の後、皇學館大学の雅楽部の学生八名を講師に招いて雅楽体験が行われた。

まず初めに学生から雅楽の歴史



や種類など全般の説明が行われ、笙・箏・龍笛の三管を始め、琵琶・太鼓・鞆鼓などの紹介があった。説明の後には実際に楽器に触れて演奏が出来る雅楽体験があり、子供たちは普段見慣れない楽器を一つでも多く体験しようと自ら学生に話しかけ、使い方を教えてもらう光景が多く見られた。また雅楽体験の最後には、雅楽部による越天楽・蘭陵王の演奏があり、その音色のあまりの素晴らしさに参加者全員が真剣に聴き入っていた。

雅楽体験の後には、皇學館大学からバス二台に分乗し、内宮へ移動。御正宮へ向かう参道の手水舎や御手洗場で手水をし、御正宮前にて森本教化部長の拝礼に併せて参加者全員が参拝した。

次に神楽殿では御神楽奉納があり、御祈禱中はその厳かな雰囲気

に子供たちも緊張した様子であったと同時に、先程自分達が実際に体験した楽器が目の前で演奏されていることに感動し、足のしびれも忘れていたようであった。

そして参拝の最後には、饗膳所にて神宮職員による説明を受けた後、席に出された饗膳を見て、親子ともどもどんな味がするのか恐る恐る口にする姿が印象的であった。



内宮参拝を終えると再びバスで皇學館大学へ戻り、閉会式が行われた。

教化部長の挨拶の後、子供たちには当日の感想文を依頼し、後日多数の感想が提出され、「雅楽体

験が大変楽しかったので、ぜひまた参加したい」との意見が多く寄せられた。参加者には集合写真を後日郵送し、感想文提出者には図書カードが送られた。

今回、雅楽体験や饗膳といった日頃体験することのない出来事を体験できたことは、子供たちを始め、付添いのご両親にとっても貴重な夏休みの思い出になったことであろう。

今後も教化委員会では、青少年対策としてこういった活動を継続していくことが、確実に氏子の教化育成に繋がると実感した一日であった。



ないも 内母さんの桜花の御神木

桑名市多度町の揖斐川に面した上之郷^{かみのごう}、香取、西福永、東福永、平賀の各地区の鎮守である内母神社（小串芳夫宮司）の例祭（十月

第一金・土・日）では石取神事が行われます。この石取神事は、桑名市・桑名宗社の石取祭が、伝播したもので、鉦^{かね}や太鼓で囃しながら祭車を曳きまわし、多度川の川原から取ってきた栗石を奉納するものです。さらに、この祭礼では、祭りの御神木である雌雄^{しゆう}の桜の花一対も納められます。この桜の花は、上之



石取祭車

郷地区の氏子によってつくられます。花をつくる家は花宿^{はなやど}と呼ばれ、

一月三日の初寄合で神籤^{かみくじ}によって決められます。そして、九月二十三日に、花買^{はなかい}い（桜の花の材料を買いに行く二人）、花切り（花を作る八人）、花出し（出来上がった桜の花を香取地区の花受けに渡す二人）の役が決まります。

祭りの前日、花切りの八人は花宿に集まり、奉書を桜の花形に切って食用の色粉を酒で溶いて染めて（雄花は花びらの先端のみを染め、雌花は雄花よりあでやかに花びらのふち全体を染める）、雌花五百花、雄花四百花をつくりまわす。

御神木となる桜は、枝振りの良い木を日頃より目をつけておき、そのうちから二本の木を伐ります（高さ約二・五メートル 幅約一・八メートル）。一方の木には雌花、もう一方には雄花を、それぞれに

二花ずつ、紙繕^こりを交差させて枝に結び付けていきます。また、御神木の天辺に飾る大きな桜を親花^{おんなばな}といつて、四個つくって雌花、雄花に一对ずつ付けます。

さらに、緑と青の紙を楕円形に切つて、葉っぱとして、枝に張り付けていきます。完成した御神木は、翌日の本楽^{ほんがく}（本祭）まで花宿に一夜飾られます。

本楽の午前十時半には御神木は、内母神社の御神紋（左三つ巴と抱き沢瀉^{おもたか}）を印した木鉢にさして、花宿の玄関に飾られます。昼過ぎになると、迎えにきた祭車の前方の左右に御神木を据え、午後一時から鉦と太鼓をたたき始め、町内を練り内母神社に向かいます。上之郷地区の祭車をはじめ各地区の祭車が神社近くで整列し宮司の祓いを受けます。

その後、祭車から御神木が降ろされ、花出し役によって一の鳥居まで運ばれ、香取地区の花受け役が受け取ります。そして例祭のための



拝殿に据えられた御神木

修祓が始まり、御神木も祓いを受け、拝殿内に雌花は右側、雄花は左側に据えられ、祭典が始まります。

一年間据えられた前年の御神木から、桜の花は外され、玉串拝礼の間に参拝者にまかれることから、人々は競い合つて拾います。持ち帰った桜の花は、以前は台所の入口などに立てていましたが、現在では神棚にお札とともに納められています。

桑名の石取祭が伝わったものという誇りに加え、桜花の御神木という特徴ある神事には、より大きな誇りをもって、氏子は毎年奉仕を続けています。

鎮座地 桑名市多度町香取二二一六

松阪神社 お木曳き行事

松阪市殿町に鎮座する松阪神社（波多瀬秀之宮司）は、平成二十八年十月の式年遷座祭を控えて、昨年十月二十五日に二十年ぶりのお木曳き行事を老若男女八百人以上の参加によって盛大かつ成功裏に終えることができた。

一カ月前の九月二十七日には、伊勢市川端町へ最終打ち合わせのため関係者一同で出向いた。同町は、二十年前にも協力をいただいた縁で、今回も四月より「松阪神社お木曳き」実行委員会（約七十名）を結成、全面的な協力度体制を整えてくれた。松阪神社の祇園神輿の担ぎ手から選抜された有志四十名の木遣り連は、これまでに何度も足を運んで唄や所作等を学び、時間を惜しんで独習してきた。当日は、その成果の再確認をするとともに、奉曳車の準備や飾

り付けの方法等についても教示してもらった。また、午後には二見興玉神社へ浜参宮し、木遣りの奉納を行った。

本番当日の十月二十五日は、風は強いながらも晴天に恵まれ絶好の日よりとなった。朝六時ごろから出発地点の愛宕町に役員や曳き手が集まり出し、また川端町から



もバスで実行委員会のメンバーが到着、奉曳車には、尾鷲で切り出された檜（長さ四・五メートル、直径四十五センチの丸太三本）を乗せて、飾り付けが行なわれた。

八時半から造営委員長等の挨拶の後、松阪太鼓の車を先頭に列をなし、奉曳車の先端での一人目の本木遣り唄に続いて、曳き綱の間に立つ道中木遣り連の唄や「エンヤ」の掛け声とともに法被を着た氏子奉曳団が二本の曳き綱（各百メートル）を曳くと、奉曳車が腕鳴りを響かせながら動き出した。途中で道中木遣りや両方の綱の曳き手が中央に走り寄る「練り」を繰り返しながら、中町で二人目の本木遣りに交代、西町（第三小学校）までの一・八キロを曳き終えた。

また、午後二時から、黒田町から神社までの〇・八キロを三人目の本木遣りで始め、午前と同様に進みながら、松阪神社の石段下まで曳いた。その後、御神木を奉曳車から降ろし横木を組んで担ぎ



手が、祇園神輿の掛け声「チョーサヤ」をかけながら石段を登り境内へ運び込んだ。

昭和初期以来途絶えていた行事を六十五年振りに平成七年に復活させ、その時参加した人たちが、次代を支える氏子たちにも同じ良い思いを伝えたいと積極的に関わってくれたことや、川端町の全面的な支援によって無事修了した。式年遷座に最も必要な神社に対する心の引き継ぎができたと関係者一同喜んでいる。

諏訪神社 宗旨祭

滋賀県との県境、伊賀市丸柱鎮座の諏訪神社（宮田幸尋宮司）では、毎年十二月上旬（第一日曜）に宗旨祭と呼ばれるお祭りが斎行されている。

言い伝えによると、元禄年間（一六八八〜一七〇四）に始まったとされており、年の瀬の十二月に氏神の諏訪神社に詣でて、一年間の五穀豊穡と村内の平安を感謝する祭りである。

この祭りを奉仕する者を当屋と言ひ、古くは氏子の中より初老の者が務め、補佐として若役一名、年寄役一名が選ばれ、祭りを取り仕切っていた。しかし、当屋を務める上での財政的な負担などの理由から、昭和三十九年より地区内十六の組が交替で行うこととなった。当屋の組は事前打合せを重ね、遺漏の無いように務める。祭の前日



清流で餅米を研ぐ

朝には、神社の清掃、幟立て、参籠所及び禊場の設営等を行う。神社から一キロほどの山あいに、小川を堰き止めて造られた禊場には忌竹を立て、注連縄が張り廻らされる。

日付けの替わる深夜零時、当屋の若手一同が禪姿で神社参籠所に集合し、禊場までの一キロを藁草履で向かう。禊場では冷たい清流で身を清めたのち、川の中で餅米を研ぐ。研いだ餅米は、参籠所にて

蒸され、約三十キロ分の餅米がつけ上げられる。

午後一時、総代、区長、当屋代表が参列し宗旨祭が斎行され、開扉に続き、神饌と共に鏡餅一重と約三百個の丸餅が神前に供えられる。午後二時、参籠所にて直会が執り行われる。板敷の大広間には氏子各戸の代表が参列する。

各々の前には折敷おしきには焼き魚、野菜煮付、杯、湯吞」



が当屋によって配膳される。太鼓の合図で直会が始まる。祭禮で供えられた御神酒が全員に注がれ、一巡すると、洗米、昆布茶が勧められる。次に熱燗が一献、二献と振舞われ、撤下した丸餅、スルメが頒けられたのち三献目が注がれる。三献が終わると、当屋渡の儀である。大きな杯に御神酒が注がれ、宮司、現当屋、宮司、次期当屋、

宮司の順で杯が空けられると、再び太鼓が打たれ、お開きとなる。

昔は「祭りに参加せざる者は村人にあらず」と言われ、

宗旨祭りに参加して初めて村人としての資格が与えられたため、各戸に於いては戸主、長男は必ず参集したそうである。

現在では全戸が参列することは無くなったが、「アツケ」と呼ばれる御膳料は全戸が持参し奉納され、撤下した餅・スルメが全戸に頒けられる。地縁的な結束が薄れていく昨今、諏訪神社の宗旨祭は現在も古式に則り神事が受け継がれている。祭りの伝承を通して人と人、世代と世代の連携が深まり、地域の結び付きをより強固なものにしている。





御遷座で「シャシャンボ」発見



緑のコーナー

津市の南部に位置する香良洲町に鎮座する香良洲神社（大河内重利宮司）の御祭神の稚日女尊わかひるめのみことは天照大御神の妹神です。神功皇后（第14代仲哀天皇皇后）が三韓征討凱旋の時、難波の海が荒れて船先が乱れた際に、軍船を守り無事上陸へと導かれたことで、活田長峽の国（いくたのながお・現在の神戸市生田神社）に祀られた神様です。

第29代欽明天皇の御代になって伊勢の海に毎晩御神火がみえるので、里人等が畏れて騒ぎとなりました。これを知った一志直青木いちしのが、御神意を伺ったところ、「吾は生田の稚日女尊である。姉神の在す神風伊勢のこの地に鎮まりたい」とのお告げがあり、生田より勧請し永く奉斎することになりました。そして、伊勢の神宮同様20年毎に式年遷座を行っています。



津市教育委員会提供

今回、平成26年の遷座を迎えるにあたり、新しい敷地と周辺を整地した際、珍しい木を見つけたそうです。当時の責任役員さんのお話によると、整地作業に参加していた造園業者が、この木を見つけました。早速地元に住む林業研究所勤務の樹木医、また三重大学生物資源学部の教授に調査を依頼した結果、ツツジ科スノキ属の常緑小高木「シャシャンボ」であることがわかりました。7月頃に白い筒状の花が咲き、果実は秋に黒紫色に熟し甘酸っぱく食用になります。樹皮は縦に細かく裂けはがれ落ち、あとが褐色や赤褐色になります。また、高さは普通2～5mですが、境内に15本あるシャシャンボのうち1本の高さは15m50cm、幹周りは1m16cmもあり、県内で例をみない大きさに育っています。これは普段、人が踏み入ることのない境内の奥であるからではと考えられるそうです。ほかのシャシャンボも見上げるほどに育っています。

「整地作業時に、木のことを知る人が関わっていたので見つけることができた。嬉しくありがたいことです」と話された役員さん、遷座も無事成し遂げて、当時を振り返る感慨深げな表情が印象的でした。

鎮座地 津市香良洲町3675

教化にともなう原稿・ご意見を募集しています。（下記編集委員まで）

- | | | | |
|--------|-----|-----|-------|
| 教化部長 | 山本 | 行恭 | （鈴鹿） |
| 教化担当理事 | 金山 | 修 | （名賀） |
| 前教化部長 | 森本 | 巖 | （北牟婁） |
| 編集委員長 | 宇治土 | 公貞尚 | （伊勢） |
| 委員 | 秦 | 昌弘 | （四日市） |
| 〃 | 平野 | 直裕 | （桑名） |
| 〃 | 宮田 | 幸尋 | （上野） |
| 〃 | 西尾 | 直也 | （志摩） |
| 〃 | 多田 | 久美子 | （津） |
| 〃 | 中山 | 清治 | （松阪） |
| 〃 | 遠藤 | 玲 | （員弁） |
| 〃 | 原 | 忠照 | （神社庁） |

御社名欄にご利用下さい。

発行 三重県神社庁 津市鳥居町210-2 ☎059-226-8042 発行日 平成28年6月30日